

## 近松と「王舎城の悲劇」

沙加戸 弘

近松世話浄瑠璃中『女殺油地獄』は、近松晩年におけるリアリズムの高次に到達点を示す画期的な作品として高く評価されているが、未解決の部分も少くない。その最たるものは、さまざまの悪事を重ねた主人公河内屋与兵衛が、捕えられる寸前口にする発心悔悟の言葉である。それまでの与兵衛の行動があまりにも非論理的で常識外れの悪逆であるために、この発心悔悟が真実のものかそれとも自暴自棄的なものか、あるいはその他の理由によるものなのかということをめぐる、多くの説が立てられた。昭和四十六年八月には学習院女子短期大学の諏訪春雄博士が、雑誌「文学」所収の論文『女殺油地獄』の読み方』の中でそれまでの論を整理し、新しい『女殺油地獄』の読み方を提唱され、かつ与兵衛の発心悔悟は『女殺油地獄』一曲の感情の自然な帰結であると論じておられる。

しかし、この懺悔発心の解明にはさらにもう一点、『女殺地獄』と仏教説話「王舎城の悲劇」との関連を明らかにする必要があると考える。以下『女殺油地獄』と「王舎城の悲劇」との関連について、若干の考察を試みたい。

### 一

著名な仏教説話「王舎城の悲劇」が『観経』の序分を始めとして多くの経典に説かれているのは周知の事実である。のみならずこの「王舎城の悲劇」は説話集にもとり入れられ、『今昔物語集』を筆頭に、『宝物集』・『三国伝記』・『私家百因縁集』・『打聞集』等に収められている。

さらに内容が極めて劇的であるために、日本における「王舎城の悲劇」の受容は、単に説話のみに留まらず、その劇的性格の必然的結果として、和讃に、浄瑠璃に、歌舞伎にとその展開を迎えることができる。中でも、寛文九年の古浄瑠璃『びんばしやらわう』は「王舎城の悲劇」そのままを浄瑠璃化した点、および『女殺油地獄』への直接の影響も考えられるという点で、注目すべきものである。

近松門左衛門がこの説話を浄瑠璃の中にとり入れたきっかけは、無論この説話のおもしろさであったと考えられるが、それを可能にしたのは前述のような「王舎城の悲劇」の芸能化・演劇化の伝統であったと思われるのである。近松の作品では、『鎌田兵衛名所恋』・『持統天皇歌軍法』等において、展開上重要な位置に引用されている。

### 二

さて、阿闍世太子が国王の位を得んとして父頻婆娑羅王に反逆し、さらに父を助けた母をも殺害しようとし、家臣にとどめられて果し得ず、最後には仏法に帰依して救われるという「王舎城の悲劇」の展開は、近松の世話物浄瑠璃『女殺油地獄』の展開の中に組み込まれていると見ることができないかと思われる。

以下極めて大雑把に『女殺油地獄』の展開をたどってみよう。

大阪本天満町の油屋河内屋の放蕩息子与兵衛は、河内屋の家督を継ごうと画策するが、父徳兵衛には通じない。与兵衛は父徳兵衛を足蹴にし身代を渡せと威しつけるが、この暴力行為は母おさわによって妨げられてしまう。母おさわは与兵衛に対し、

① ヤイごうさらしめだ いばめ

と叱りつけるのである。ここで「だ いばめ」と「王舎城の悲劇」の陰の主役提婆達多の名が母おさわの口をついて出るのは注目し値する。次に与兵衛は母に対しても乱暴を働く。与兵衛は自分を勘当しようとした母に打ちかかるが、それを制止するのは父徳兵衛である。父とは言っても徳兵衛は実は養父であり、先代徳兵衛の時代は河内屋の番頭であった。つまり徳兵衛は与兵衛にとって

① たとえあの悪人めおだん義に聞様なしゆりはんどくの、あほうでもあじやせたいしの鬼子でも、母の身でなんのにくからふ、いか成悪ごう悪えんがたい内にやどつてあの通りと思へば（傍点筆者）

と、どうにもならない自分の矛盾を愚痴るのである。「世尊、我宿何罪、生此悪子。」と積尊に問うた韋提希夫人の言葉と通ずるものがある。

以上のように考えてみると『女殺油地獄』最後の与兵衛の発心悔悟の言葉解明に、一つの手がかりが与えられるのではないかと考えられる。与兵衛は結末に至って、それまでの悪事を次のように懺悔している。

② 思へば廿年来の不孝無法の悪業が、ま王と成て与兵衛が一心の眼くらまし、お吉殿殺しかねを取しはかはちや与兵衛、仇も敵も一ツ悲願なむ阿弥陀仏、

この部分について多くの論議のあることは冒頭に述べたが、この部分は正しく古浄瑠璃『びんばしやらわう』の結末部分および『観経』下品下生の部分を背景にしたものと考えられる。『びんばしやらわう』第五には、

③ そのとき、あなん、とかれしは、ごくちうあくにん、むたはうべん、ゆいしやうみだ とくしやうごくらく

このときに、あじやせたいしもぜんじやうよりのあくをわすれ みだ一しんに、しやうみやうせり

かゝる十あく、五ぎやく ひぼうの人も、みだ一ぶつのひぐわんによつて、おなじくほうぼだいの、こころとなりて あんらくごくに わうじやうす

とある。この結末こそ、親に反逆し人を殺した十悪五逆の人間が仏の名を称することによって救われてゆくという『観経』下品下生の文とともに、与兵衛の懺悔を支えるものであろう。ここに至るまでには、人間の理知・分別による解決が如何に救いようのないものであるかという「王舎城の悲劇」の展開をふまえた『女殺油地獄』の展開があった。やることを為すこと全て裏日裏日と出る

緊迫した地獄の様相の上に開かれてきた与兵衛の救いである。

#### 四

以上のような関連をふまえて考えられることは、近松が「王舎城の悲劇」を『女殺油地獄』の中にとり入れたのは、単なるおもしろさや劇的効果のためだけではなかったであろうということである。つまり、与兵衛の非論理的な悪逆が現実そのものであり、現実そのままが即地獄であるという『女殺油地獄』一曲のテーマが、必然的に「王舎城の悲劇」をひきよせたその結果であろうということである。言いかえれば、『女殺油地獄』と「王舎城の悲劇」との関連は、近松が最初から「王舎城の悲劇」で以て事件を脚色しようとして成立したのではなく、現実を深くとらえてゆくうちに、現実そのものの中に「王舎城の悲劇」を発見したことによって成立したのであり、これは、近松門左衛門の現実に対する見方の問題として扱えなければいけないのではないか、ということである。

〈補注〉①『女殺油地獄』富山房刊『近松世話物全集下巻』に

よる。

②『観経』岩波文庫『浄土三部経下』による。

③『びんばしやらわう』角川書店『古浄瑠璃正本集五』

による。

### 南方仏教における法滅思想

野々目 了

#### 序

北方仏教において強調され、日本仏教とりわけ日本浄土教に大きな影響を与えた「正・像・末」の三時思想は、仏教史上における種々の社会的影響を受けて発展したものでありと考えられている。この思想は、そのままの形では原始仏教には説かれていないが、その源は原始聖典に説かれる法滅思想にまで遡り得る。そこで、原始聖典に説かれている法滅思想を整理し、更に、その思想が後世の南方仏教の中に如何に展開していったかを究明したい。

#### 一 原始聖典における法滅思想

法滅思想を説く経典の数は、それ程多くはないが、それらを大別すれば次の三つのグループに分けられる。

##### ①「正法久住」を説く経典

Vinaya III p. 21; IV p. 21; IV p. 213; SN, V pp. 172~174; AN, III p. 297; IV p. 340 etc.

これらの経典は、いずれも、ある条件が満たされれば正法久住は可能であるとしている。そこには漠然とした法滅への危惧はあるものの、未だ正法久住の望みは残されている。

##### ②「女人出家により正法五百年住」を説く経典——Vinaya II